

# 昭和36年（1961）6月豪雨災害（1/2）

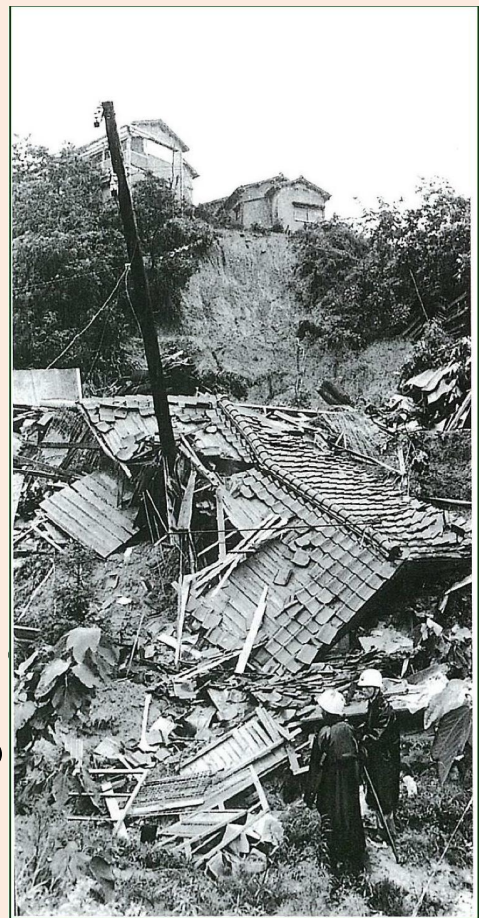
## （1）災害の状況

昭和36年6月24日の午後から降り始めた雨の総雨量は神戸海洋気象台で510mm、森林植物園で520mmと昭和13年災害と同程度でしたが、被害は昭和13年に比べて市街地への土砂の流出量が少なかったため、洪水や土石流による被害は多くはありませんでした。その反面、山崩れを起こした土砂が直接人家を襲うといった災害が、昭和13年より数多く発生しました。



▲昭和36年6月26日付 神戸新聞夕刊

▶ がけ崩れで倒壊した家にも危険が迫る（神戸市長田区高取町）



## 昭和36年（1961）6月豪雨災害（2/2）

### （2）山地災害と治山工事

- 少なかった土石流被害

土石流が少なかった原因は、昭和13年災害は短期強雨型、昭和36年災害は長雨型で、雨の降り方が全く違っていたことが考えられます。

- 山腹崩壊の特徴

発生した崩壊土砂も谷筋に建設された堰堤を埋めるにとどまり、市街地まで流出することはありませんでした。

崩壊と傾斜勾配との関係を見ると、 $20^{\circ}$  くらいまでの山腹では山崩れが発生していませんでした。また人為的な原因で発生した崩壊が多いのが特徴でした。

### （3）宅地開発を規制する法律の制定

- 山崩れによる人家の被害が多発

昭和36年当時は阪神間で山麓の大規模開発が進行しつつあり、以前までは山崩れが発生しても、直接人家までは達しませんでした。開発によって市街地が山麓に迫り、山崩れが直接家屋に被害を与える時代になっていました。

神戸市では、災害防止の観点から六甲山の山麓にまで拡大する危険な宅地開発を規制することのできる法律の制定を国へ働きかけていました。昭和36年災害は崖崩れが多発して多くの死傷者を出しましたが、昭和37年に制定された「宅地造成等規制法」制定のきっかけとなった災害です。

#### ▼六甲ハイツ跡南のがけ崩れ（神戸市灘区）

